「長州藩永代家老　益田家」

西国の命脈を繋げた若きよそ者

長州藩永代家老家を築いた
益田 元祥（ますだ もとなが）とその父・益田藤兼の物語
（益田氏は毛利家譜代の臣ではない）

2017年7月27日（木）

高瀬清流

江戸期末期　禁門の変で3家老切腹

- 益田右衛門佐親施（ちかのぶ）
- 福原越後
- 国司（くにし）信濃

- （俗論派による正義派の粛清）

毛利本家　支藩（末家と呼ばれる分家筋）

- 長州藩：　　石高は３６万９４１１石。

- 萩藩主（一族の本家）

- 長府藩　　長府毛利家　　８万３０１１石

  藩祖は毛利元就四男の穂井田元清の子で、毛利輝元の養子となった毛利秀元

- 徳山藩　　徳山毛利家　　４万１０石
  清末藩　　清末毛利家　　１万石
  岩国藩　　岩国吉川家　　６万１石

一門（いちもん）六家、準一門（永代家老）二家

- 一門　　宍戸家　　１万１３２９石

安芸国の国人領主・**宍戸氏**の当主。　毛利元就の娘を妻として一門衆となった。

一門　　右田毛利家　１万６０２３石
一門　　厚狭毛利家　　８３７１石
一門　　吉敷毛利家　１万　８５５石
一門　　阿川毛利家　　７３９１石
一門　　大野毛利家　　８６１８石
準一門　　益田家　　１万２０６３石
準一門　　福原家　　１万１３１４石

重臣の寄組（よりぐみ）

- 重臣の家柄で大組頭や手廻頭などに任命され、加判、当職（国相）当役とうやく（行相）などの家老職に抜擢されることもあった。時代により異なるが約60家があった。一門六家、永代家老とともに自身の家臣団（陪臣）を抱えていた。
- 筆頭が堅田家（６１２６石）、
- 国司家（５６００石）、
- 粟屋家(４９１５石）

中堅格の大組（おおぐみ）

- 藩主毛利氏の直属の家臣で藩内門閥士族。馬上を許された広義の上級家臣で中士上等。8組あり、2組が江戸藩邸を、その他の6組は萩城の警護を担当。別名は馬周組（家来がいるのは大組まで）

高杉晋作や桂小五郎（木戸孝允）はこのグループで、禄高は１０００石から数十石の者まで、幅広くいました。

例：　大組筆頭は周布氏（1530石）　周布政之助は分家（219石）の出身

高杉小忠太　：　大組・200石

桂家の養子：　桂九郎兵衛孝古：大組・150石

大組以下の身分

- **遠近付**（えんきんづき）、
- **無給通**（むきゅうどおり）、
- **徒士**（かち）、**三十人通**（さんじゅうにんどおり）
- **士雇**（さむらいやとい）、
- **細工人**（さいくにん）、．．．．．．．
- **足軽**（あしがる）、．．．
- **中間**（ちゅうげん）、．．．．．．

毛利氏・福原氏は同族

- 毛利氏

出自 鎌倉幕府政所別当**大江広元**の四男・大江季光を祖とする一族、したがって大江広元の子孫ではあるが嫡流ではない。 毛利元春の代に安芸に下向し吉田郡山城にて領地を直接統治。　室町時代に安芸国の有力な国人領主に。　山名氏および大内氏の家臣として栄えた。　戦国時代に元就が一代で戦国大名に脱皮。

- 安芸福原氏

安芸国の国人領主であった毛利元春の五男広世が同族の備後長井氏へ養子に入り、後に内部荘福原を所領としたことから福原を名字とした。

なお**毛利元就の母親は福原の出**である。

戦国期末期の大きな戦い

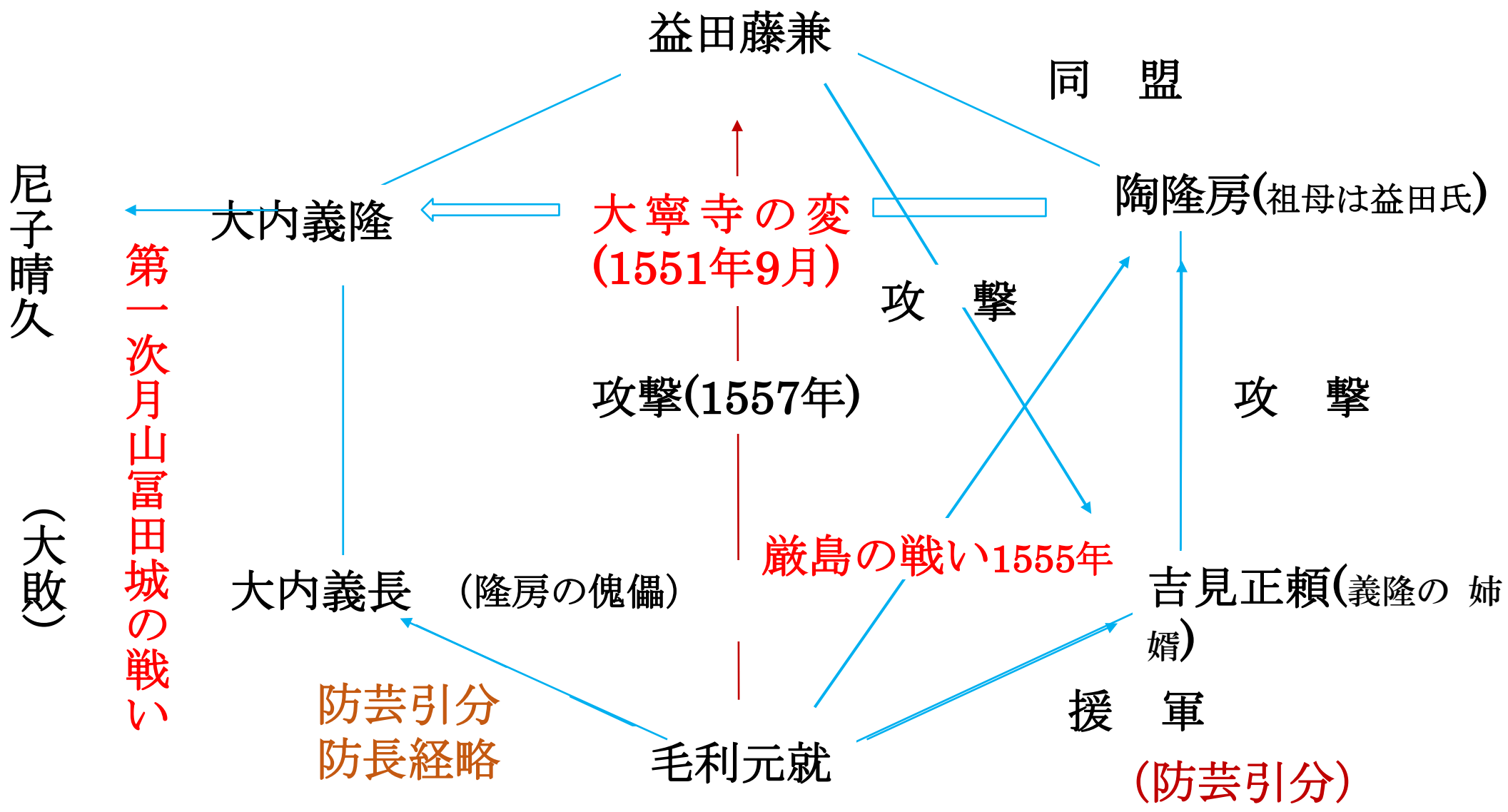
- 154３年：　**第一次月山富田城の戦い**：　　大内氏が尼子氏を攻める
  （大内側敗戦）
- 1551年：　**大寧寺の変**：　陶晴賢が西国随一の戦国大名とまで称されていた大内義隆を攻め義隆が自害させられた政変。
- 1582年：　**本能寺の変　⇒　豊臣秀吉　天下平定**
- 1600年：　**関ヶ原の戦い**
- 　　毛利輝元は西軍の総大将として大坂城、毛利氏の運営は秀元及び恵瓊と吉川広家によって担われていた。秀元自身には戦意があったとされるが、広家がそれを押し留めた。　敗戦後輝元は改易されかけます。広家が家康に働きかけ、毛利家は減封処分に。　安芸120万5000石　⇒　周防・長門36万9000石へ
- 1615年：　**大阪夏の陣**

益田氏系図の研究

- 東京大学資料編纂所に「益田家文書」が所蔵されている。
- 鎌倉時代からの16,000点もの厖大な史料
- https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/23/kiyo0023-02.pdf
- 中世前期益田氏の実像を求めて

- 中世前期石見国に関する研究は史料的制約もあってこれまで多くはなく 力を持つ益田氏とその一族について検討を加えた かったが、近年、西田友広氏が守護の問題とともに、石見国最大級の勢力を持つ益田氏とその一族について検討を加えた。
- 益田氏は〈系図 1〉＊に示す御神本氏一族の惣領で、三隅・福屋・周布氏などを分出している。

尼子
益田
須佐
萩
石見
吉見（津和野）
毛利
宇部
山口
周防
長門
出雲
伯耆
因幡
美作
備後
備中
安芸
筑前
豊前
豊後
伊予


益田藤兼
同　盟
尼子晴久
大内義隆
大寧寺の変
(1551年9月)
陶隆房(祖母は益田氏)
第一次月山冨田城の戦い
攻　撃
攻撃(1557年)
攻　撃
(大敗)
厳島の戦い1555年
大内義長　(隆房の傀儡)
吉見正頼(義隆の　姉婿)
防芸引分
防長経略
毛利元就
援　軍
(防芸引分)

益田藤兼-1（石見の国人領主益田氏第19代当主）

- 益田氏は藤原氏を祖とする平安時代末期から続く石見の領主。
- 第一次月山富田城攻め　初陣
- 一族の周布氏、三隅氏らを傘下におさめ
- 津和野三本松城吉見正頼と抗争関係（応仁の乱以降）
- 陶氏とは姻戚関係もあって、親しくつきあっていた。
- 大内義隆への謀叛のこと「大寧寺の変」を知らせていたようだ。
- 山口の情勢に接した藤兼は、隆房への加担を決めた。
- 大寧寺の変　勃発

「大寧寺の変」背景・経過

- 陶氏は大内氏の傍流：　戦国時代となり、陶興房は大内義興・大内義隆の補佐を務める。
- 興房の後を継いだ陶隆房（後の晴賢）は大内義隆政権の中枢
- 第一次月山富田城の大敗北や文治派側近衆の相良武任との確執もあり（陶氏は武功派の中心）義隆との関係悪化。
- 他の重臣らの同調を得て山口攻略。（義隆は楽観。時間をかけた対立。）
- 長門の大寧寺に逃れた義隆を自害に追い込んだ。
- 謀反人としての非難を避けるため義隆の跡継ぎに義隆の甥（大友氏に嫁いだ姉の子供：大友晴英　⇒　大内義長）を当主とする。

「大寧寺の変」・影響

- 隆房の謀反に同調した元就は、新領地を得たことに加え、毛利氏の麾下に入る領主が増え、安芸国の大部分を毛利の勢力圏とした。
- 大内氏と激しく抗争を繰り広げていた尼子晴久は8ヶ国の守護に任じられた。さらにこれまで大内の支配下だった備後に出陣
- 文治的だった義隆政権を否定して軍事力強化に走った義長・晴賢連合の新政権は、大内家支配下にあった国人や諸大名への賦役を増大させたために、かえって反発を受けるなど領国統治に不安あり
- 陶氏を仇敵とする吉見正頼が陶打倒を掲げる（三本松城の戦い）⇒（毛利氏が大内方から独立する）**防芸引分（断交）**のきっかけ
- 安芸の毛利元就も晴賢と対立　⇒　**厳島の戦い(1555年)**　　⇒　毛利氏の防長経略

益田藤兼-2

- 大内氏傘下の国人領主の1人
- 大寧寺の変で陶晴賢に協力（晴賢の祖母は益田氏）
- 陶晴賢が擁立した義隆（義興の嫡男　大寧寺の変で自害）の甥・大内義長に外交手腕を評価され重用された。
- 吉見領に侵攻しているが、吉見正頼（室は大内義興娘、義隆の姉婿）率いる吉見勢も頑強な抵抗を見せる。

毛利（吉川）氏、石見を攻める

- 弘治3年（1557年）に防長経略を行い、大内義長を滅ぼした。
- 前後して吉川軍および周辺の小豪族、吉見正頼も益田領へと侵攻
- 石見の当主として益田藤兼は戦う構えを崩さなかった。
- 宍戸隆家から降伏の勧め
- 藤兼は毛利氏に降伏(1557年)

毛利氏の益田氏処分

- 元就は「義隆を殺した大罪人」との理由と益田藤兼が長年、吉見正頼と対立したことを勘案し、藤兼の処刑を考えていた。
- 吉川元春がその武勇を惜しんで助命したため、本願地（氏族集団の発祥の地）を安堵され、以後は毛利氏の家臣となった。
- 吉川家と行動を共にすることが多くなった。
- 藤兼の嫡男元祥と吉川元春の娘の婚儀なる

益田兼堯（かねたか）像

雪舟　筆

竹心周鼎（ちくしんしゅうてい）賛

益田藤兼坐像

益田元祥像（狩野松栄作）

国の重要文化財

益田氏の城（七尾城）大手門跡

（現在は医光寺総門）

毛利氏に降った後の益田藤兼の戦歴

- 毛利家家臣として、北九州で大友宗麟と闘う。
- 1565年　「第二次月山富田城の戦い」

藤兼家臣の品川将員（勝盛）が山中幸盛（鹿介）と一騎打ち戦った場所が富田川の中州でであったため、別名「川中島の一騎討ち」とも呼ばれる。この戦いの結果は、幸盛が将員を討ち取る。一騎打ちは川を挟んで対峙し、両陣営の見守るなかで行われた。

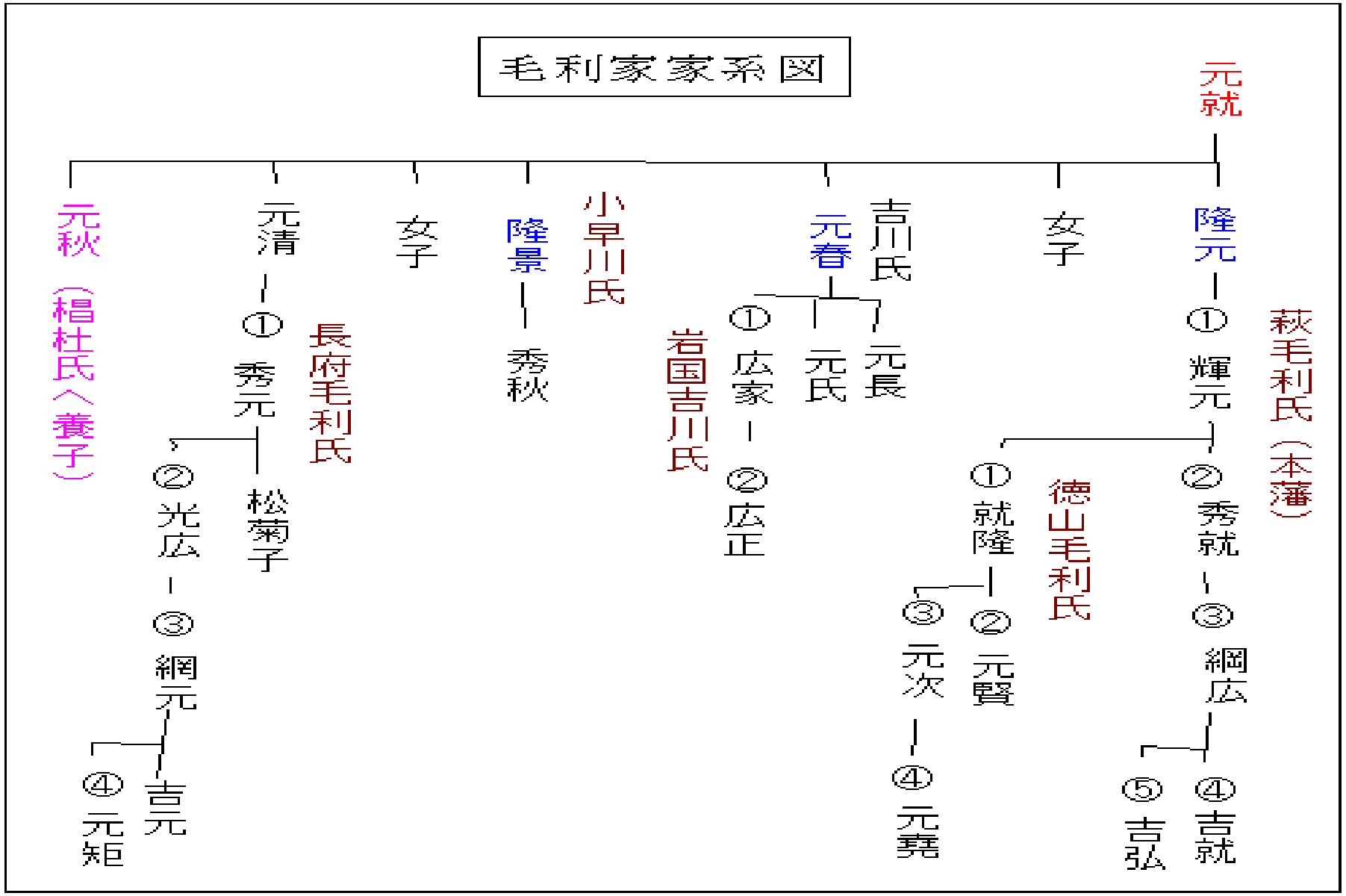
戦いの様子は、『雲陽軍実記』『太閤記』『陰徳太平記』に残されている。

尼子氏や大友氏との戦いで出雲・伯耆・豊前を転戦して活躍。

嫡子元祥の室に吉川元春の娘を嫁あわす

1597年　益田藤兼　死去（享年68歳）：　嫡子　元祥：　39歳

元就以降の毛利氏主要家系図



関ケ原合戦　慶長5年9月15日（1600年10月21日）

- 吉川広家や毛利秀元ら毛利一族、福原広俊、　家臣団の反対を押し切って西軍総大将へ。　西軍敗退。
- 家康：　「毛利氏は改易し、領地は全て没収する」
- 毛利氏安泰のための内応が水泡に帰した吉川広家は進退窮まる形になった。
- 吉川広家は自分自身に加増予定の周防・長門（現在の山口県）を毛利輝元に与えるよう嘆願
- 先の毛利氏本家改易決定を撤回し周防・長門29万8千石への減封決定。（10月10日）
- 輝元は出家し、家督を嫡男である秀就（ひでなり6歳）に譲り隠居する。

関ケ原の戦いの戦後処理

- 毛利輝元（安芸広島　112万石）：西軍総大将　大阪城留守居
  ⇒　新領：　（長門・萩　29.8万石）
- 毛利秀元（周防　山口　20万石）：　関ケ原本戦
  ⇒　新領：（長門・府中5万石　石高は毛利本家より文知）
- 毛利広家（出雲・富田　14.2万石）：　本戦で東軍に内応
  ⇒　新領：（周防・岩国　3万石）

当初は周防と長門を加増予定。広家の嘆願で毛利氏へ知行。岩国は幕末まで毛利本家より支藩扱いを許されず（理由に諸説あり）。のちに60,000石に高直し。

益田元祥（もとなが）益田氏第19代　戦歴

- 1558年誕生　父は益田藤兼　母は大内家臣石津氏の娘
- 1568年　毛利元就を烏帽子親として元服（10歳）
- 1576年（天正4年）嫡子　広兼誕生：　（元祥18歳）
- 1578年　上月城の戦いに、岳父・吉川元春・元長父子と共に参加。
- 1582年　備中高松城の戦いにも元春に従軍。同年父より家督を譲られる。
- 1583年の賤ケ岳の戦い以降　主君の毛利輝元が豊臣秀吉に臣従後
- 　四国攻め、九州征伐、小田原征伐にも功績
- 　文禄の役、慶長の役でも吉川広家に従って渡海して戦功。
- 　関ケ原の戦いでは広家に従い、伊勢安濃津城を攻略。

関ケ原の戦い後の徳川家康からのさそい

- かねてより益田元祥に着目していた徳川家康は、元祥に内密に通達することがあるといい、大久保長安を仲介として使者を送った。すなわち周防・長門の二国の身上となった毛利氏には、多くの家臣は必要ないとして、毛利氏には元祥の子景祥を留めておき、元祥自身は石見にあって徳川家に奉公すべし、というものであった。さらに、知行は元のまま石見益田を宛行うがどうか、という願ってもない通達であった。

- これに対して元祥は、益田家は毛利家の譜代の臣でもなく、先祖代々石見に住しており、そのまま石見に残って奉公を申し上げたいが、毛利氏に対する恩義もありこれを果たしたい気持ちでいます。と家康の好意を有り難く辞退したのである。家康は重ねて元祥を招いたが、元祥の気持ちは変わらなかった。

長州の危機：六か国返租問題（1）

- 毛利氏は関ケ原の敗戦により8か国領有を防長2国に減封
- 本拠地・安芸をはじめ6か国を失い、既に徴収していたこれらの国の５年度分の貢租（こうそ）について新領主たちから返還を迫られる。そもそも、ほぼ４分の１に減った総石高でどうすれば家臣たちを養えるのか。　総額はざっと15､6万石。
- しかし毛利側も合戦などでつかってしまい、無い袖はふれない。
- 最も強硬だったのは安芸の新領主・福島正則
- やっていけず禄を捨てて出奔の例、召放たれ（解雇）、新領国へ行くのを諦め帰農、返租米調達の為、給領地を売った者もいた。
- ついに毛利輝元はパニック状態となり、「領有してもやってゆけないから、２か国を幕府へ返上する」とまで言い出した。

長州の危機：六か国返租問題（2）

- 思い悩んだ輝元は筑前福岡の黒田如水に知恵を借りに益田元祥らを派遣
- 如水は諭す：たとえ２か国を返上しても、既に取った租米は返納しなければならないのだから、2国を抱えておけば、何か才覚も生まれてくる。
- 如水のことばを聞いた輝元は溜息
- 打開策を福原広俊らに探らせた。　重役が鳩首会議（３日間）：　案無し
- もう一晩考えて、各自書面にて案を出すこととしたが、上席の誰からも案無し。
- 最後に益田元祥は案を出す。　益田提案の趣旨は、引き続き毛利家の領国となった防長2国についても旧領主がそれぞれ主君輝元へ返租し、それを他の６か国返租にあてるというものだった。　６か国返租の重荷をその地の旧領主たちだけに負わせず、皆で分かち合うというのだ。

- 益田元祥は東奔西走

益田元祥が登用された当時の長州藩の環境

- 関ケ原合戦の纏りの欠けた、煮え切らない負け戦で藩主も藩士も、「思考停止状態」、「茫然自失」
- 毛利氏は８か国から防長２国に減封
- 宗家と吉川家、長府藩（秀元）との間がしっくりいっていない。
- 家臣団には減封に対する不安や不満が満ち溢れていた。
- 安芸、備後、出雲、周防、長門からの多くの国衆が狭いところに押し込められ、習慣や作法も異なり、まとまり、融和が図りにくい。
- 新たな国作りに使える金が無かった。

慶長6年（1601年）末日

- 毛利三代実録

- 「今年秩禄を群臣に賜う。　旧秩を五分にし、その一分を以て定額とす」：　元祥起案？

- 家臣は家禄・給料をわずか５分の１に減らされたのである。
- 痛みと無念はそれぞれの家で語り継がれていく。
- ⇒　大リストラの予告

益田元祥、萩城の築城担当　(1604年～1608年)

- 築城総宰（総責任者）

益田 元祥および熊谷元直　を登用

五郎太石（ごろたいし）事件

　萩城二の丸東門の普請に必要な五郎太石（石垣の裏や隙間を埋める小石や砂利）が天野元信（元直の娘婿）の者が運び入れていた石が盗まれたことを発端として、毛利家重臣の熊谷元直らが処罰された事件である。（処刑は輝元からの棄教の命を拒絶し、毛利領のキリスト教信者の庇護者となったからだと言われている。）

益田元祥は福原広俊（13代当主）と共に藩政を任される。

- 藩政改革
- 財政問題　　山代慶長一揆が発生　農民の逃亡
- 検地　農民保護
- 家臣団の融和
- 毛利一門の結束（宗家は岩国藩を認めず）

大阪夏の陣に縁者を入城させる（1614年）

- 毛利家首脳陣（秀元、輝元、秀就　）

　は共謀し他の家臣団に内密で、内藤元盛（佐野道可）を大阪城に入城させる。

　資金提供も疑われる。

・事件発覚後、福原広俊（13代）は幕府対応に苦労。

事件発覚後、吉川広家は嫡男の広正に家督を譲って隠居。1616年に福原広俊も辞任。　1623年4月20日に二代将軍から仕置きを命じられ、9月23日に輝元が秀就に家督を譲って隠居。

益田元祥が再度藩政を取仕切る

- 1620年　孫の益田元堯（もとたか）に家督を譲って隠居。
- 1623年：　輝元から藩政を委託される。（65歳）　副役：清水景治
- 財政再建に取り組む
- 1625年：　検地を再実施：　数度の検地で収入は変わったが家臣の地行高は変更されないため、差額分は直轄領として組み込む。。
- 貢租を紙に変更して紙を徴収する請紙制を実施した。紙は大坂で売却され大きな利益を上げた
- 農民保護と田畑復興政策も実行、借金の利息を減らし、逃亡した農民の呼び戻しや新田開発にも取り組み財政再建に全力を尽くした
- 家臣団の大幅な所領改替も行われ、藩主家の直轄領が収入高の土地を中心に増加、藩主の権力伸長にも繋がった

防長三白政策の基礎を開く

- **藩外に出荷して収入源にできる特産物**
- **米**：　厳しい見地による石高向上

  開作；　干拓によって耕地を造成する事を開作と呼び
- **紙**：　長州藩は後に全国の製生産高の30％を占め、全国一の製紙国として藩財政に大きく寄与したとされる。　石州和紙（ユネスコの無形文化遺産登録）の技術を導入か？

塩：　開作と並行して塩作りを行い藩の専売事業とし、長州藩の貴重な財源であった。

このような三白（或は櫨蝋を含む四白）政策を含む努力の結果、幕末の長州藩は約100万石の内高になっていたとされる。

益田元祥：　財政基盤を固める

- 結果、寛永9年（1632年）に長州藩の負債を返却、余剰金及び米の備蓄も可能になり、長州藩の江戸時代における財政基盤を固めることに成功した。
- 同年に藩政から引退。（74歳）
- 37万石の長州藩の知行を実高54万石にまで上昇させた功労者
- 寛永17年（1640年）9月22日に死去。　享年83歳

益田元堯（もとたか：元祥の孫）
藩財政の立て直し

- 1646年

隠居の身ながら藩財政の建て直しを命じられる。藩主から財政建て直しの全権委任と反対派への処罰の権限を与えられ、藩士の禄を2割減知することで2万石の増収を生み出し、財政の改善を成し遂げた。

1658年　　死去　家督は益田就宣（ますだ なりのぶ）へ

益田家のその後

- 益田元祥：　1640年　卒　　享年：　83歳
- 益田元堯（もとたか）：　1858年　卒　享年：63歳

- 元祥の功績から、元堯（もとたか）以降の子孫は毛利氏の永代家老として江戸時代を通じて活躍することとなった。
- 禁門の変の責任者として切腹した益田親施は著名
- 明治維新後は男爵

皆様へのご質問

- 益田元祥までは毛利の、血筋ではありません。譜代の臣でもありません。

- 輝元をはじめとする毛利首脳陣は何故、元祥を起用したと考えますか？
- なぜ益田元祥の藩政改革成功は成功したと考えますか？
- なぜ益田家に永代家老職を命じたのか？
- なぜ西国の雄藩として明治維新を起こせたのでしょうか？

益田家の家禄

- 益田本家：　元祥の孫　元堯（もとたか）が嫡孫承祖１万２０６３石
- 門田益田家：　元祥の次男　景祥（かげよし）兄の急死で父と奔走 4、096石
- 寄組　益田家：元祥の四男就之（なりよし）の子孫　父・元祥の隠居料3,000石のうち、2,000石　⇒　1,086石を相続
- 寄組　益田家：　元祥の五男就景の子孫　　1,067石

- 益田家一門で約2万石の家禄
- 子孫は毛利家、福原家との血縁関係を深める
- 「萩の土塀は苅(須佐)で持つ」：　須佐郷土史研究会